

新型コロナをホンネで語る 学生座談会

遠隔授業や行動制限、ワクチン接種など、新型コロナウイルスに翻弄された学生生活をどう捉え、今何を求めているのか。大学生6人に専門家を交えたクロストークをHO編集部がリポートしました。



ファシリテーター
(司会進行)

西尾 直樹さん

北海道大学CoSTEPフェロー／
株式会社 聴き綴り本舗 代表

座談会メンバー

M・Kさん(北海道大学医学部3年)、K・Hさん(北海道大学理学院2年)、S・Tさん(札幌学院大学経営学部3年)、H・Iさん(札幌大谷大学短期大学部保育科2年)、R・Aさん(北海学園大学経済学部3年)、U・Tさん(北海学園大学経済学部3年)

専門家

北海道保健福祉部技監 人見嘉哲さん、北海道大学大学院医学研究院教授 玉腰暁子さん、北海道大学CoSTEP准教授 川本思心さん

不安や不自由なコロナ禍を
自分なりに受けとめて

西尾(司会進行) 新型コロナウイルスの感染拡大が発生した当初と今とで、大学生活に変化はありますか？

S・T 大学生になっていきなりの遠隔授業に苦労しました。課題提出など、スケジュールを管理することに慣れていなかった。対面授業になって周囲と声を掛け合えるようになり、すごく楽になりました。

M・K 1年次の教養科目を他の学部生と一緒に学べるのが楽しかったのですが、全て遠隔授業になってしまい、他学部に友達をつくれずじまいでした。遠隔ではグループワークもやりにくかったです。今は、声や表情を直に受け取れる対面授業の良さを実感しています。

R・A 自分は逆に、遠隔授業のほうが合っているなど感じています。3年次から対面授業になりましたが、最初は構内の人の多さに困惑しました。あと、受験真っただ中のマスク不足には悩まされましたね。

H・I 私も感染拡大当初は怖くて、家から出たくなかったです。今はワクチン接種が広まったことなどから、恐怖心は薄れてきました。

U・T 入学前、一番不安だったのは、「大学に行かずに友人

S・T 3回接種しましたが、周囲には「副反応で2日も寝込むのは嫌だ」とか、「予約の手続きが面倒」という声が決して少なくありません。予約不要で何かのついでに接種できるくらい手軽であれば、若者の接種率は上がるのかもしれないですね。

K・H 2回目までは全く悩まず接種したのですが、3回目については決めかねています。ワクチン接種後の後遺症例として若者の重症化や心筋症との関連性などの報告があり、悩む要素が増えてしまったことが理由です。科学的・公衆衛生的に考えれば接種すべきだと分かっていますが、感情的・感覚的に恐怖がぬぐえません。自分は科学的な人間だと思っていたけど、意外にも感情的な面があるんだなと気付かされました。

M・K 住民票を移したタイミングの関係で3回目は未接種ですが、夏休み中に打つ予定です。2回とも接種後39℃後半の発熱で2日間ほど寝込んでしまったので、試験など学業に影響のないスケジュールを周囲と相談しながら組んでいます。ワクチンについては、個人的に治験を含め詳しく調べました。中には疑わしい情報もあり、「いつの時代もデマは出る」ものだと思っ

U・T 私は何の疑問も不安も

持しが傾いています。

**信頼性や納得感も
ワクチン接種のキポイント**
西尾 ワクチン接種が進められています。20代・30代の2回目ワクチン接種率は約50%と多くはありません。皆さんは何からワクチンに関する情報を得て、

K・H 今でも換気は徹底しています。屋外ではマスクは外



周りを見つつ思いやりつつ 自分の状況に合った対策を実施

西尾 感染症対策は、具体的にどのようなことをしていますか？
K・H 大学院進学のために本州から札幌にきたのですが、オンラインにすぐなじめました。オンラインツールで本州の友人と今もつながっています。
西尾 遠隔授業については対極的な意見があるなど、状況は同じでも感じ方や捉え方は6人6色ですね。

か？ 初期と現在とで、違っている点なども教えてください。
U・T マスクや手指消毒は継続していますが、3密回避は以前ほど気にしなくなってきました。
R・A 初めの頃は、特にアルバイト時に肌が荒れるくらい手を洗い、うがいも徹底していました。最近は、自分も周りの人も当時ほどシビアではなくなってきたいますね。ただ、感染を防ぐ努力は、この先も必要だと思っています。

H・I 初期には大学から配布された体調管理カードに、毎身体温などを記録して提出してました。今は学外実習の2週間前だけ。アルバイト先の保育園に通う子どもへの感染リスクを減らすためにも、マスクは必ず着けます。本当はマスクを着けずに表情を伝えたいのですが、それを補う工夫をしています。
S・T 大学構内への出入りが許可された年には、季節を問わず換気が行われていたのですが、今は冷房中には窓を閉めるよう張り紙がされたり、教室に学生が入りきらないので席間隔を空けられない状況だったり。感染症対策の理想と現実が乖離(かいり)しているように感じる場面を、最近は多く見かけます。

人見 「初めは嫌だった、怖かった」と思いながらも、学生生活やアルバイト先などでもしっかり対策をしてもらっています。そのおかげで行政も助けられている。ありがたいです。

西尾 ワクチン接種が進められています。20代・30代の2回目ワクチン接種率は約50%と多くはありません。皆さんは何からワクチンに関する情報を得て、

し、手指の消毒は肌が弱いため控えることもあります。悩みは友人など周囲の人のコロナに対する意識がどの程度なのか見えないことです。例えば、ご飯に誘ってもよいものなのか。誘う時も言葉を選びますね。
M・K 私は周囲の人の意識確認にはSNSを活用しています。投稿写真やコメントを参考に、その人のコロナに対する意識を見極めていきます。私自身は定期的に手洗いをしないと気持ちが悪いですし、アルコール設置箇所はセーフポイントと捉えて手指消毒も続けています。
西尾 マスク以外の対策については、ご自身の状況や環境による違いがあるようですね。人見さんは行政の立場から、学生たちの話をどのように感じられましたか？



何が接種する決め手となったのでしょうか？

R・A 住民票が実家にあるので、自治体指定の接種日に帰省し、3回目まで接種しました。自分で手続きをするのであれば、面倒に感じて接種しなかったかもしれません。

H・I 私は2回目まで接種しました。3回目も接種券は受け取っていますが未接種です。医療従事者を親に持つ友人から、3回目は副反応が強く出る人もいと聞いて、接種すべきか心が揺れています。

西尾 身近な人の声には、大きく影響されますよね。

H・I そうですね。とはいっても感染したくないですし、実習先やアルバイト先にも迷惑をかけられない。道内の感染者も増えてきましたので、接種に気持ちが傾いています。



うか。複数の方が3回目の接種を迷っているのも、根本的な理由は同じかもしれないですね。

情報の受信者から発信者へ 学び得た思いを今後にかす

西尾 ここまでの話の中で、最新の情報に触れることの重要性が垣間見えてきました。そうした情報を、若者にスムーズに伝えるには、こういった手法が考えられるでしょうか。

H・I 一番目に留まるのはSNSだと思っています。インスタグラムであれば、ほとんどの友人が使っています。例えば、コロナ関連のアカウントを大学が通知してフォローを促せば、情報が行き渡るかもしれません。

S・T 情報源はツイッターとNHKニュースですが、最近アクセスすることや、気になること自体が減りました。そうはいつても、情報源としてのSNSは有効だと思います。日頃から面白い情報を発信している人や魅力的な人が、必要な時にコロナの情報を発信していけば、自分からは情報を取りにくいかないう層にも届くのではないのでしょうか。

K・H 欲しいのは場当たりの通達ではなく、例えばマスクが与える副次的な影響など、広い視野や多面的な視点からの情報、これまでの対策と結果を検証し

た情報などです。それを同世代が求めているのかは分かりませんが、そういった情報をまとめたサイトがあれば、自分なら頻繁にアクセスすると思います。

M・K 私は札幌市のコロナ特設サイトを定期的に見ています。数値をグラフで可視化するなど動きがあるので分かりやすいですよ。私自身も、北大生に1・2回目のワクチン接種を推奨する活動に取り組んだ経験があったので、ポスターやインターネットサイトを作り、学年LINEで情報発信をしました。重視したのは、問答無用で目に入る状況をつくることです。ポスターは掲示後に「私が作ったから見ろ！」とアピールしました。やはり身近な人の言葉は届きやす



いので、若者には若者からの発信が有効ではないでしょうか。

U・T コロナの情報がユーチューブやSNSで流れてきても、私は読み飛ばしてしまいます。個人的には、後で読み返せるメールの方がSNSより情報を受け取りやすいかな。

R・A コロナの前からフォロワーしていた鈴木知事のツイッターが自分にとっては貴重な情報源になりました。今ではコロナに関してはウェブニュースを眺める程度ですが、どの情報も正しくてどれがデマなのか、見極める必要があると思います。SNSは確かに若者に浸透していますが、信頼性に欠けるような印象がありますね。厚労省など情報の出どころが確かかも重視するべきです。

西尾 興味深い意見がたくさんありましたが、こうした発想を玉腰さんはどう思われましたか？

玉腰 北海道大学では緊急事態宣言を受けてすぐに大学独自の対策を始動したのですが、その2日後には学生の有志が主体となってツイッターで情報を発信していました。大学からのメールは添付されたPDFを開かなければ詳細が分からないようになっていて、そのPDFも文字ばかり。伝えたいことが一目で分からないという問題を、学生



は画像1枚と制限文字数140字で再構築して発信したんです。大学からの通知をあまり見ない学生にも、ツイッターやLINEなどのツールを駆使してもらさずスピーディーに伝えていく。若者たちの発信力のすごさを実感しました。

西尾 確かにそうですね。ほかにも若者ならではの柔軟な発想の中にたくさんヒントがありました。学生の皆さんも、この変化の中で得た思いを、より広い場で多くの方に届けてほしいと願います。